

アナログ時代からデジタル時代への転換期の中で、遠隔医療の成長、医療ネットワークの充実など様々なデジタルツールを活用し地域医療も大きく様変わりをしている。しかし、地域住民の状態を瞬時にかつ的確に判断し患者の望む医療をいつでもどこでも提供できるという地域医療の根源は揺るがないものでなくてはならない。このことを実現しさらなる地域医療の充実を目指すためには、医療者として「 $+\alpha$ の力を重視すべき」であると私は考えた。

「 $+\alpha$ の力」とは、次の2点である。まず第一点目は、「相手を知ろうとする力」だ。近年、医療情報連携ネットワークというものの普及が進められている。このシステムを活用することで患者の状態の変化だけでなく、患者を取り巻く様々な条件を速やかに把握できることは言うまでもない。しかし、データだけに目を奪われ本来見るべき患者自身の姿や声を見逃してしまつては、患者自身が求める医療を行うことなどできないのではないだろうか。また、合理化を進めるがあまり病名や治療方針を一方向的に伝達する「伝える医療」になりうる危険性をはらんでいる。だからこそ便利なツールを活用しながらも、やはり診察室で診るのと同じように患者とのやりとりを大事にし、言葉にならないものも受け取ることができる感性を私は身に付け、「支える医療」を目指していきたい。

第二点目は、「地域力を生かした医療の提供ができる力」だと私は思う。医療のデジタル化が進むことで、どこでも誰でも同水準の医療を受けられるようになることは望ましいことである。しかし、型にはまったやり方が常にあてはまるとは限らない。私の住む宮崎は交通の便が悪く陸の孤島と呼ばれているが、その分地域のネットワークには強い結びつきがあり、「健康相談会や集いの会」などが積極的に行われている。そこには、地域の保健師や役場職員など様々な人が関わっている。このような既存のシステムを活用した医療の展開を行っていくことが地域医療をさらに充実させることにつながると思う。

以上、このような結論に至ったのには、忘れられない言葉との出会いがあったからだ。私は昨年末にボランティアでカンボジアに行き子ども病院を訪問した。日本とは比較にもならない施設であり、医療器具も整っていない状態だった。私はそこで出会った医師に「この地域の医療を充実させるために必要なものは何ですか」と尋ねた。当然、最新の医療器具などという答えが返ってくると思っていたが、私の思いとは全く違う答えが返ってきた。医師は「子どもの病気だけを診るのではなく親も見ろ。つまり、生活状況や養育能力も見てサポートをする力」と語って下さった。地域医療も同じではないだろうか。どんなに便利なツールができたとしても、患者や地域との対話なしでは地域医療の根源は守れない。よって、地域で地域の人々を支えられる医療のシステム作りの手伝いができる医療者を目指したい。